

ひこどめじんじゃせきぞうほうとう
彦留神社石造宝塔

彦留神社については、延暦年間（782～806）の創祀で、近江守護佐々木京極氏の崇敬が厚く、近郷の在地領主も武人として崇めたと伝わっており、江戸時代には亥大明神・彦留亥神と称し、明治以降に彦留神社となりました。

石造宝塔は、彦留神社の境内敷地の北端、高さ約 0.3m、直径約 5m程度の円形の土盛り上に設置されています。この土盛り周囲には礎石 1 基と五輪塔の水輪部分 2 基が存在し、礎石については板石の上に設置されており、現在では手水鉢として転用されています。

石造宝塔については、相輪、笠、塔身、基礎の石材が揃っているものですが、それぞれの石材石質（いずれも花崗岩ではあるが、わずかに鉱物組成が異なる。）や規格、劣化の度合いの違いから、もともと別個体であったものを集めて構成されていると判断できます。全高が 323.8 cm、最大幅（基礎部）が 114.5 cm。制作年代としては刻銘が確認できないため実年代は不明ですが、塔身部の形状、特に勾欄の表現が、鎌倉時代末期から南北朝期のものとされている金剛輪寺宝塔と類似しています。

基礎については、高さ 58.2 cm、幅 114.5 cm、奥行き 115 cmを測るもので、格狭間は陽刻され、内部に文様は彫られていません。上面には高さ 3.8 cmの段が付いています。

塔身については、軸部と首部が 1 つの石材で作られており、高さ 76.2 cm軸部の最大径 72 cmを測ります。磨滅が著しく彫刻の判別は難しいが、外周に 12 本の柱を表現していると考えられるわずかな膨らみが確認でき、本来は柱と扉形の表現があったものと考えられます。上部についてはドーム状に丸みを帯びて狭まり、勾欄部となっています。勾欄部についても円筒形で、勾欄が 12 の長方形の凹みで表現されています。

笠部については、笠と露盤が 1 つの石材で作られているもので、高さ 45.1 cm、幅 97.5 cmを測ります。ともに平面四角形を呈し、笠部は宝形造り、下り棟は反りは弱いもので、下端近くに面が作られ鬼瓦を表現しています。相輪部については、一般的なもので、下から伏鉢、請花、九輪、請花、宝珠までが 1 つの石材で作られています。寸法は、高さ 140.5 cm、九輪部の径 22.7 cm、背が高く、寸胴な印象を受けるものです。



彦留神社石造宝塔 全景

本件については、石材表面の磨滅が著しく、記年銘等は残存していません。また、各部の石材についても、笠と塔身については正安 4 年（1302）の記年銘のある石塔寺宝塔や、編年研究から鎌倉時代後期のものと考えられ、金剛輪寺宝塔と同時期のものであると判断できますが、相輪の請花の形状が反らずに丸く収まる点や基礎の格狭間内の文様が印刻にならず陽刻になっている点などに形式的に退化傾向が確認でき、これらについては時代が下るものの後補石材と考えられます。ただし、これらの石材を使用して、構成されている宝塔が保存されているということは、当地の中世仏教文化を物語るにあたって欠くことのできない文化財であると同時に、小字と

して法蔵寺や藤田屋敷、東出屋敷等の地名が残存している点からも当地の中世社会全体を考えるための貴重な物証としても期待できるものであり、保存の必要があると考えられます。